

短編小説

めんない千鳥

森岡 稔

1 共生会病院

共生会病院は城南中学校に隣接していた。木枯らしが吹きすさび、道行く人も背中を丸め一様に足早である。

共生会病院は伊勢湾台風の時、多数の被害者が出たのを機に近隣の人々がお金を出し合ってつくった病院である。

年老いた森川良江が小さな移動式のテーブルを前にしてベッドを起こして座っており、その息子の進はパイプ椅子に座ってリンゴを剥いていた。進のいる病室には、中学生たちのボールを蹴る音や笑い声がガラス窓を通して聞こえて来た。

進の母はそれが実はいやだった。

進には母がなぜそれを嫌がるのか、最初理解できなかったが、看病しているうちにだんだんその理由がわかってきた。

ベッドにばかり寝ている自分に較べて、自由にとびはねる中学生がうらやましいのである。

良江には中学生たちが健康を誇示するような明るさがうとましかったのである。

進はそんな単純なことに気づかなかったことを少し反省した。

「もうすぐ夕食の時間だね」

「うん」

もう短い返事しかできない母であった。

見るのも聞くのもいやなはずの中学生たちのボールを蹴る姿を、することもないので、ぼんやり進と母は2人で見ている。

「今日はいつまでいる？」

進の母は心配そうに聞いた。

進は、ボールを蹴る中学生をもう見せまいとベッドのすそについているハンドルをまわしてベッドを水平にして母を寝かせた。

進は自宅に妻と四才の子供を残しているの、時間を区切って妻と交替で付き添いをしている。

交替の時は、自動車で三十分の道の程の自宅まで急いで帰らなければならなかった。進の母が心配そうに聞いたわけは、側に居て欲しいのはやはり自分の血を分けた息子だからである。病気でもやはり嫁には遠慮があった。癌で頭をおかされている母にも、まだそのことは理解できた。

記憶はもう、かなりなくなっているし、物事の認識や判断力も弱くなっているのだが、身内がそばにいるかいないかは理解できる。病人にとっては親身になって自分の世話をしてくれる人がそばにいるかいないかは大問題だからである。

「あまり今日は居てあげられないけど、ここの看護婦さんは親切だから心配ないよ」

しかし、身内以外の付き添いは誰であろうと病人にとって、無力である。

そのことは進にとってもわかりすぎるくらいわかっていた。親切かどうかは、自分が離れた母をよく看護してもらいたいという願望から出た言葉で、むしろ自分に言い聞かせている言葉であった。

「お母さん、外は寒いみたいだよ。焼き芋屋が病院の外でいもを売っていたよ。結構安くてよく売れてるみたいだよ」

返事が返ってこないことはわかっていて、進は母に話しかけた。

「早く直って、また夏がきたら好物のスイカを食べようね」

「—————」

返事が無言であるので、進は元気だったころの母はどういう答えをするか想像しながら話を続ける。

「そういえば、スイカを切って食べる時にお父さんと僕とお母さんとで争ったね。お父さんのほうが大きいとかお母さんのほうが大きいとかでさ。」

進の父親は心臓弁膜症で三年前に他界している。

父をなくした悲しみが癒えきらないのに、母はあと1カ月ほどの命しかない。進はこんな悲しみにどうして耐えることができているか不思議だった。

——これは夢なんだ——

進はとんでもない悲しいことにあうと、これまでの三十八年間はいつもそうしてきた。一種の現実逃避である。それを処世術としていた。

「スイカのときもそうだし、イチゴの時もそうだったね」

食べることの話ばかりである。

母の応答のないのにもかかわらず進は話し続けた。

そのときドアに遠慮がちにノックの音があった。

「お食事ですよ。」

それまでの母と子の2人きりの世界に、外の世界が少しはいつてきた。病院の食事時間

である。

煮魚に野菜、そしてみそ汁とご飯が膳の上にのっていた。

ここからが進の仕事の始まりである。

進はいつものようにベッドに卓上テーブルをおき、水平にしたばかりのベッドをもう一度起こした。

おかずが母の好物の煮魚であるが、もう自分では箸で骨と身を離すことができなくなっていた。

せっせと進は、食べさせる支度をてきぱきとを進めた。

進はご飯の上にほぐした魚の身をのせた。

進の母は元気なころはそういう食べ方を「犬のご飯」だといって嫌っていた。嫌っていた「犬のご飯」のやりかたに抵抗をしめさない母にも進は、悲しみをこらえた。

でも点滴ではなく、ご飯という形あるものを食べてくれるだけでもありがたかった。

進はもくもくと電車の機関士のように頭に描いた項目どおりの手順で食べさせる動作を行なった。

母は頭の腫瘍が大きくなっているせいもあって、すでに目の焦点は定まっていない。

しかし、自分が食事をしているのだということはわかっている。驚くことにお盆が曲がっていることまで気にかける。

進の母はむかしから几帳面な性格であった。

洗濯も食器洗いも良江がするとピカピカであった。

ものごとの判断力が乏しくなっても人間のそういう性分はなかなか消え去らないのだろうかと進はふと思った。

進はほぐした魚の身とみそ汁を中ぐらいのスプーンで母の口に運んだ。レンゲでは食べさせにくく、大匙のスプーンでは口にうまく入らない。小匙では時間がかかりすぎる。まさに中ぐらいのスプーンが一口ぶんに適していた。

「はい、あーんして」

スプーンを運ぶたびごとに、このように声をかける。

母はガムをかむような食べ方をしていた。

進はかつてそんなふうに使っていると、クチャクチャやって食べるものではないよとたしなめられた。

母がそうやって食べるのを見て、母が元気ならば「お母さんもそんな食べ方をして」と仇をうつのだが、今の進は母がどんなふうに使ってもかまわなかった。母が食べる力の残っていることだけでも無上の幸福を感じるのであった。

食べ物が喉を通り過ぎるのを喉元を見てきちんと確認してから、進はまたスプーンを母の口に運んだ。

髪が病のためすっかり白くなり、皮膚もひからびて日照りのあとの水田のようになって

いる進の母の体は、子供のように小さくなっていた。

しかし、現実から離れ正直で無垢な性格な母は、天上に召されて行く準備をしている天女のようにも見えた。

そんな母を見るとき進は、生死の重大さにくらべたら日ごろの悩みなどケシ粒ほどのものであろうといまさらながら感じられるのであった。生きているだけで人間は崇高なのだとも思えた。

時間をかけたそのような食事はなにか儀式のようだと、進には感じられた。進には母を見るにつけ、死と対面するときの残されたわづかな現実の生は、何につけても神事へと変容するように思われたのだ。

つまり生そのものが奇跡と化するのだと思った。

人間の生は終わってみればまさに夢幻のごとくである。しかし死に直面するものにとっては一瞬一瞬が砂時計の砂のように刻まれる貴重な時である。

進にとって母が食事の時であろうとトイレにたつ時であろうと、一時一時が峻厳な時と感じられた。

だから、母のすることが神につかえ神に召されて行く儀式のように思われたのである。

食事がおわり、ジュースを「らくのみ」で飲んだ。リンゴジュースがおいしいと進の母は言った。

髪を手櫛で梳く姿に進は母が「おんな」を貫く精神を見た思いがした。自分がこのような状態になったときはたして身だしなみを気にするであろうかと思った。

また、進は母がまくらが自分に合わないと先日不平を言ったのを思い出した。そのくせ、注文どおりのまくらを与えるとやっぱりもとのまがいいといった。病人はわがままであること世間では言うが、なるほどそうであった。

しかし、進にはそのわがママがうれしくも感じた。もっとわがママを言ってくれ。それで親孝行のかわりができるのならと思った。

このわがママをいう母が生き続ける保証があれば、たとえ母が永久にわがママを言い続ける暴君のままでいるという条件付きの契約であったとしても、すぐに神と契約を結んでよいと思った。

母のわがママのうちでも、進がもっとも困惑したものは、母が共生会病院に入って「担当の医者が悪い」から病院を変えたいと言い出した時であった。

進には、母の死が免れないことがわかっていた。だから、どうにかして死を最も楽な形でむかえさせたいと思い、この病院の選択したのであった。

というのは、設備もよく医者も看護婦も親切という点で、この共生会病院ほどふさわしい病院はなかったからである。

しかし、母がこう言いだした以上、進は母の希望をかなえたい気持ちに揺れ動かされた。

進にはわかっていた。

母は自宅の近くの病院に入院していれば、親戚の者が面会しやすい。進には母がそう考えていることは察しがついていた。

わかっているからこそなおつらい。

しかし、この共生会病院に一日でも生きながらえることができると判断して、身を切られる思いで母の申し出を拒否した。

2 すずめ百まで踊り忘れず

昨日は、次のようなことがあった。

ベッドに横たわりながら、踊りを舞うのである。舞いながら、何か意味不明な歌を謡っている。

進の母は、若い頃に西川流の名取を取得した。その踊りの発表会のあでやかな写真が家に残っていた。

ある時、アルバムを整理することがあり、長い年月によるその容姿の変貌ぶりがひやかしの対象となった。

「これ、本当にお母さん？」

「そうよ、きれいでしょ」

「信じられんなあ。でもすごいね。何の踊りなの？」

とたんに母は、謡いながら踊りはじめた。

「わかった。わかった。本当にお母さんだよこれは」

「わかりやいいの」

そう言いあって家族が笑いあった思い出がある。

それを思い出しながら進は、ベッドの上の母の踊りを見ていた。元気なころの母がだぶった。

死を前に人は自らの全人生を追体験するのだろうか。

母は現に今そうしているではないか。死が近いと進は直感したが振り払った。何も言わないとこの緊張から抜けれないと思い、

「お母さん、踊っているの？」

進は話しかけたが、母は答えずに、踊り続けていた。

「検温の時間です」

母は入って来た看護婦にもまったく無関心である。

「踊っていらっしゃるんですか？」

「ええ、昔、舞踊を踊っていたことがあってそれを思い出しているんでしょうね」

「森川さん、おじょうずですね」

すると、驚くことに進の言葉には反応しなかった母が看護婦のその言葉で自分の世界から

現実の世界にもどってきた。

母は身内ではなく他人である看護婦に認めてもらったと思ったから反応したのだろうか
と進は考えた。

「こうやって踊るんですよ」

進は家にある三味線を思い出した。時々、母が取りだしては弾いていた三味線である。も
っと良いのが欲しいと母はこぼしていた。

『おけいこの先生でもしよかしら』と言い出したときは家族みんなが反対した。本当に
うまいのかという疑いではなく、なんとなく、家族にはそういう世界が浮わつた虚業の世
界だと思われたからである。

しかし、それはひどく母の自尊心を傷つけたことを家族はそのとき気付かなかった。

良江は芸事が好きでならなかった。

良江の両親は、そんな良江が若い頃に日本舞踊が習いたいとか三味線を習いたいとか言
うとその通りにした。

その通りにした両親であったが、踊りの道に本当に入ろうとしたとき、猛烈に反対した。
あくまで、習い事で留めたかったのである。女は平凡に家におさまるのが最良と良江の両親
は考えていた。

両親に逆らうことが一度もなかった良江であったが、結局芸をとった。

良江は家出した。

良江の夫は尚人と言った。進の父である。

戦後フィリピンから復員してきた尚人は、生来の歌好きが昂じて歌手となり、温泉まわり
の地方巡業専門ではあったが劇団の前座としての歌手となって全国を回った。

程なく日本舞踊が踊れて歌謡曲も上手に歌える良江が入団してきた。家出のすぐあとの
ことである。

良江の十八番は「めんない千鳥」であった。

2人ともはじめはソロで歌っていた。

楽屋で兄さん、兄さんと尚人を慕う良江に、尚人もわるい気がしなく恋仲となり、所帯を
もった。

夫婦になった2人はデュエットで歌うことになった。しかし、ある時尚人が背広の上下、
くつ、帽子を白で統一したまではよかったが、こともあろうに何小節目かの男性のパートの
歌詞をすっかり忘れてしまった。

良江はすかさず男性のパートを即興で女性の歌詞に直して歌い、何もなかったかのよう
に歌い終わって事なきを得た。

進は、そのころの様子を何度となく聞かされた。

「お父さんたら、あのときあたふたあたふたとしたのよ。わたしが、気をきかしたのでよか
ったのよ。お父さんが楽屋に帰って来ると汗びっしょりだったの」

尚人をからかうときは良江は徹底的である。

尚人はいつもこう言いわけした。

「あの時、本当は喉に何かつまって声が出なんだのや。だのに、良江がでしゃばりおって」

進は、うそ丸見えのこの夫婦のやり取りが好きだった。今はこの世に2人ともいないが、テレビで夫婦漫才をみるたびに2人の姿を彷彿とする。

『めおと』という言葉はいいなと進は思った。

夫婦（ふうふ）と言うより、「めおと」の方が何か生活や縁（えにし）が感じられていい。そんな気持ちが進の心に甘酸っぱくひろがった。

3 尚人のギター

巡業中に覚えた尚人のギターは天分もあったのか上手であった。

そもそもこの尚人は器用な男で、我流ではあるがギターのみならずバイオリンも弾きこなした。

尚人は人柄もさっぱりしていて、はじめて会った人にもきさくに話しかけた。すうっと人の心に入り込むようなところがあった。心に飾るものがなく、人情が厚かったからであろうか。

ある日、喫茶店で進が父とコーヒーを飲んでいたら、あまりにも親しそうに隣に座っている人に話しかけているので進は父に聞いた。

「知ってる人？」

「いいや」

「だってとっても親しそうに話してたよ」

「ははは」

進はこんな屈託のない父を見る時、なぜこの性格が自分にも遺伝しなかったのか不思議に思った。内向的な自分に比べて、この父はあまりにも明るい誇らしげに思うのであった。

楽屋で、てすさびに弾くギターに、いっしょに巡業をまわっている女の子たちは聞き惚れることがあった。とりまく女性たちに、良江はやきもちをやき、ギターを隠してしまうことさえあった。

巡業が尚人の郷里の四国愛媛宇和島に来たとき、長男の健太が生まれた。両親のよいところを選びとって生まれて来たような眉目秀麗の健太は、どこに連れて行ってもかわいがられた。

知らない人さえ抱かせてくれと願った。

実際に二人が健太を連れて銭湯に行けばちょっと抱かせてくれと言われ、うどん屋に行けばうどんをただにするからとそこの主人やかみさんから、抱かせてくれと言われた。

進はこの話も耳がたこになるくらい聞かされた。

嫉妬もしたが、しかし、そんなにかわいい赤ん坊であれば嫉妬を乗り越えて兄弟としてうれしいとも思った。

しかし、美人薄命とは言うが、男性の場合もあてはまるのだろうか。

長男の健太は、戦後の食料事情にもよる栄養失調と風邪で1才半で死んだ。

飯粒のない茶碗を箸でチャリンチャリンとたたきながら死んでいった。まさに消えるように死んでいった。

その話を聞いている進は、四才になる長男が茶碗を同じようにチャリンチャリンと箸でたたいて遊ぶと縁起でもないと言われ長男をひどく叱る。そのとき、長男はなんで叱られたのか、いつも怪訝そうである。

健太が死んだあと半年ほどして、明美が生まれた。この子も痩せて弱かったが、あるとき餅を食べたら、無心に食べた。そして尚人が与え続けるとみるみるうちに太って回復した。

痩せ細っていたころの明美がうそだったかのように元気になった。

健太のこともあったので尚人と良江は胸をなでおろした。

明美が生まれたころに、良江と尚人は巡業団をやめた。芸人は河原乞食ともいわれたころである。子供の教育にも悪いと二人は考えた。

4 太平洋戦争

いろいろな職業に尚人はついた。良江は飯場の飯炊きもした。

尚人がついた仕事は炭鉱夫、アイスクャンデー売り、土方、木材加工、ネクタイ販売、不動産業などであった。しかし、どれも天運は味方せず大成はしなかった。

進はそんな父の人生をまんざらでもないと思っている。立身出世をするのも人生であるが、尚人のようにひとに迷惑もかけず、自分の思うように生きるのも一つの人生の在り方である。実際に尚人が死んだ時、財産も残さなかったが借金も残さなかった。

進は、尚人がキャンデー売りをしている頃に生まれた子である。

尚人と良江にとって進は苦しい生活のなぐさめとなった。

進はかわいさという点では健太の足元にも及ばなかったが、健太をなくして以来の、男の子の誕生だっただけに2人の喜びもひとしおだった。

進は少々変わっていた。

進が2つくらいのときであった。地面にむしろを敷き、そこに座ってなさいと両親が命ずると、2人が朝仕事に出かけて夕方に帰るまで、一日中じっとしていた。

のちに進がそのことを聞かされ、むしろに一日中放っておく両親も両親だと驚いたが、一日中動かない自分が自閉症だったのではないかと悩んだものである。

夫婦は、おめでたいのかそんなふうには考えずに進をただ者ではないとそのとき思ったのである。

一方、そんな進をみた近所の者はこう、噂した。

「この子はひと汽車遅れとるで」

ひと汽車おくれるというのは知恵遅れの意味である。

しかし、尚人にとっては持ち前の反論があった。

尚人はこう反論するのである。

「お前達の子らが進と遊ぶのをわしゃ見とった。カタカタ（動かすとピストン運動をしてカタカタと音のする小さな手押し車）をお前らの子が操ると壁につきあたったら泣いとった。ところが見てみい。うちの子は壁につきあってもちゃんと、とってかえして遊ぶんじゃ。器用なもんじゃわい。ひと汽車遅れとると言うたら承知せんぞ」

ただその一点だけが進の優秀さの根拠であった。

進も何度もその話を聞かされ、おもちゃ屋でたまにその玩具を見かけると愛着がわくのであった。

尚人は転々と職をかえたが結局妻の父親が名古屋で営んでいる木材加工業に腰を落ち着けた。そして他界するまでに二十年間名古屋に在住したのである。

進は京都の公立大学に進み卒業して地元名古屋に帰って高校の先生になった。

明美は神奈川県で会社員に嫁ぎ、2男1女をもうけた。

尚人は平成元年十月に六十九才で他界した。フィリピンに従軍した経歴のある尚人は頑強な体つきをしていたので、棺桶もひとまわり大きいものだった。

フィリピンでの戦争体験は尚人には青春そのものであった。

苦しくもあり楽しくもあった。

進は父から、父の脚に鉄砲の弾が残っているのを教えられ、すでにその弾が父の肉体の一部にかわっているのを知りとても感心したことがあった。尚人は、戦火が激しくないころ現地の土人の酋長の娘と恋仲になった。タガログ語をその娘から習い、タバコやバナナ、黄金の短剣をもらったりした。

写真も何枚か撮ったが。

のちに尚人は復員して大切にしておいたが良江に見つかるところとなり、当然のごとく破り捨てられた。

酒に酔ったときに、まだ小さい進に尚人は、

「進、美人はココナンテというんだぞ。よう覚えとけよ」

真偽を確かめようもない進であったが、まだ知り得ぬ父の異国の話に夢中になった。

「大学でタガログ語の先生もできるぞお父さんは」

高等小学校も満足に出ていない進の父が、大学の先生になる可能性は毛頭あるまいが、もし教授になったようすを想像するとかかなり楽しい講義になるだろうとも思った。

進は父の葬式の時、棺桶に父の歌ったラバウル小唄のカセットテープを入れた。その歌を歌うのが好きで、よく一杯飲んだりして機嫌のいい時に尚人は歌った。

軍隊あがりの尚人は、右翼の宣伝カーを見るとわざわざ窓をあけて自動車の中から「ご苦労さん」と声をかけた。

自衛隊を違憲だと思っている進ではあったが、この父の態度をいやだとは思わずにむしろ、ほほえましいとさえ思った。

自分の思ったことを行動する父が好きだった。

独特の節回しでうたうラバウル小唄は、絶品であった。

たった1枚のハガキで召集され、戦争に人生を翻弄されたのだが進の父はすこしも恨みに思っていないで、生き抜いた。

戦争で死ぬはずだった命かもしれなかったが、明るく生き抜いた。

そんな父に進はなんでもない平凡な人生にも、かけがえのない1回きりのの人生の重みがあると思った。一つの固有の歴史がそこにある。

そして、進は父の死後、思い出の中に生きようと思った。

知恵子抄を読んだときに高村光太郎が知恵子の思い出に生きると書いてあったのを読んでそのときには気休めにすぎないと思っていた進ではあったが、今では思い出に生きるという言葉の意味が本当にわかるのであった。

5 建国記念の日

平成四年二月十一日建国記念日が進の母の命日である。

皆が法事に来やすいようにその日を選んで死んだのかな、母は、気配りの人だったからと進は愚にもつかないことを思った。

死を前にして、一月三十日良江は六十五才の誕生日をむかえた。

病院の看護婦は進にその誕生日を祝う計画があると進に言った。

どんな計画かというと、昼食を病院でとらずに、車椅子でとりにあるプラタナスという喫茶店へ行き、進の妻の清美と母と看護婦三人で簡単な昼の食事会をするというものであった。

しかし、こんなささやかな祝いの宴でも進の母は大喜びした。

「お誕生日おめでとう。いつまでも元気でね」という添え書きとバラの花束を看護婦からもらった。

清美が食事代金を払うというというつもりではないですからと2人は固辞した。

進は仕事で行けなかったのだが、あとで様子を聞かされて、とめどもなく涙が出た。

どんなに、母がうれしかったか……。最後の誕生日だとも知らない母の喜ぶ顔を想像していとおしさに涙がとまらなかった。

二月十日に進の母が危篤になった。翌日は建国記念日で祝日で学校も休みなので進も泊まり込んでいた。

脳まで癌が冒しているのですでに運動機能が停止していた。

脳幹という呼吸中枢まで病魔がおそうのは時間の問題だった。

口をあけ苦しそうに息をするので、進は濡らした脱脂綿で口のなかを湿らせた。水は飲めない。水のかたまりを飲み込むことができないのである。唇を湿らすことが唯一の水分補給である。

吸引機で喉につまる痰を看護婦がひっきりなしに取りにくる。

心拍数をはかる機械が無機的に数を刻んでいる。進の目はその数字と折れ線にくぎづけになった。折れ線が母の命そのもののようには思えた。

「森川さん。森川さん」

看護婦も答える訳がないのに呼びかけた。

心拍数を示す折れ線がフラットになった。

医者が時刻を告げた。

進は映画やドラマで何度もこんなシーンをみた。これもスイッチを消したら「かわいそうだったね」でおわるドラマだったら……。

そうでない現実には、何かしら腹がたった。

進は言い知れぬ怒りのあと、涙がとめどなく溢れ、人目もかまわず号泣して母に頬ずりした。

「お母さん、お母さん」

まだ体温が残っていた。

もうスプーンで食事を運んであげられない自分が残念であった。

頭が混乱していた。

早朝に、親戚のおばが駆けつけテキパキと化粧を施してくれたのはありがたかった。どんどん冷えて行く母に、進は息を引き返すのではないかという奇跡をまだ願っていた。

病院から自宅へ運ぶ自動車が来たとき、驚いたことに玄関には担当医と夜勤あけでいったんは帰宅した看護婦も含め、全員が並んでいた。

進は平凡な母にもかかわらず、みんなが集まってくれたありがたさに涙がとまらなかった。涙でくしゃくしゃになった顔を取り繕うこともなく深々と頭を下げた。

2年が過ぎた。

進が自動車を運転しているとFM放送から「めんない千鳥」が聞こえて来た。

男性歌手が歌っていたが、しだいに進には母の声にかわって聞こえて来た。

進は「めんない千鳥」に曲が合うはずもないのに、曲に重ねて「ラバウル小唄」を歌った。

(終)